別紙様式４（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　畑本　裕介

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

再帰性と社会福祉・社会保障

――＜生＞と福祉国家の空白化

論文要旨（別様に記載すること）

（注）１．論文要旨は、A4版とする。

２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。

３．「論文要旨」は、フロッピーディスク（１枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

提出論文の要約

畑本裕介, 2008,『再帰性と社会福祉・社会保障――〈生〉と福祉国家の空白化』生活書院

1．全体の要約

本論文は、アンソニー・ギデンズの再帰性理論を導きの糸として、現在の社会保障制度及び社会福祉の理念に関連した諸問題を理論的に解明しようとしたものである。

日本の社会保障・社会福祉を基底で支えた理論として「貧困」言説があったが、次第にその説明力が弱まっていった。本書はその後の展開を狙うものであり、まずは社会を編成する中心原理として「再帰性」概念について理論的に検討した。その後、具体的な制度や事例を扱い、マクロの問題として特に中産階級問題の発生とその対策としての政治のあり方を検討した。また、ミクロの問題として社会福祉にまつわる事件の解釈枠組みの変化について検討し、具体的事例として札幌母子家庭の母餓死事件の解釈の多元性などを取り上げた。

以下には、順を追って、以上の考察を論述した各章についての要約を行っていきたい。

2．第一章（再帰性論以前の社会理論）

この章では、わが国における貧困概念を二つの系統において分類し、時代に応じてこの概念にどのような意味合いが持たされてきたのかを明確にしていった。一つ目は、社会文化的な最低限度の生活が困難な低所得の層を対象とした概念であり、いわゆる直感的な貧困のイメージを代表するものである。これを江口英一が言った「低所得階層」に倣って「層としての貧困」と呼んだ。もう一つは、国内のほとんどの層が貧困化していくという国民の全体的貧困というとらえ方である。この概念は、労働者の資本家への従属を導く生産関係への注目を生み出したり、社会・自然環境の悪化による生活の貧困化といった新しい貧困認識を切り開いたりした。これを下田平裕身に倣って「総体の貧困」と呼ぶ。わが国の貧困認識はこの二つの概念が混在することになった。

80年前後の貧困の再発見の時期を除いて、戦後の焦土から高度成長を経て80年代に入るまで、また消費社会が出現した80年代以降の多くの時期において、注目されてきたのは総体の貧困の視点であった。そのため、低所得層、社会の下層へ注目する視点は十分に育たず、現在貧困現象が不当に軽視される状況の一因となっているのではないかと分析した。また、社会福祉・社会保障の言説の多くがこうした視点を基盤に展開された時期であったとも分析した。

3．第二章（再帰性論の定義と展開）

アンソニー・ギデンズは、以上に説明した日本の貧困言説（総体としての貧困）にあたる言説状況一般を「解放のポリティクス」と名付けた。さらに、現代では、主要な言説の

在り方がこのポリティクスから「ライフ・ポリティクス」へと移行していくと主張する。この「ライフ・ポリティクス」を具体的分析に適用する前に、その理論的基盤となる概念を分析したのがこの第二章である。

ギデンズの展開する社会理論のキーワードの一つ、おそらくは最も重要なキーワードは再帰性（reflexivity）である。我が国でも、ギデンズ理論の概念的分析にはかなりの蓄積がある。とはいえ、宮本氏が「ギデンズ社会理論の全体像という観点からすると、『行為と構造』、および『歴史と運動』という２つの論点を機軸に構成されている」としているように、概念（社会学原論）と実践的分析（現代社会論）の連続性については十分な配慮が払われてこなかった。

この章では、この両者の関連性に主に焦点を当て、彼の理論の全体像を明らかにするために、まずは、再帰性概念とは何かを原理的に考察し、再帰性概念の定義的意味合いを明確化した。具体的には、再帰性とよく似た概念である反省（reflection）や反射（reflex）との違いを明確にすることにより、再帰性自体の内容を定義的に考察していくという方法をとった。

それから、概念が必要とされた理由、現代社会におけるその位置づけを順を追って明らかにしていった。その後、グローバリゼーションという論点を中心に論じる中で、ギデンズの政治的立場である哲学的保守主義とはいかなる立場であるかを、再帰性概念に関する彼の理論との関連において分析した。

４．第三章（再帰性と社会福祉・社会保障の現在Ⅰ――マクロの問題）

第三章・第四章では、第一章・第二章で扱った理論からの視点で、より具体的な現代の社会保障・社会福祉の状況について見えてくる問題点を取り上げた。

まず、第三章では、マクロな視点からの考察である。「リスク社会」と呼ばれる現代の状況について概観した後、特に社会保障・社会福祉の問題で注目されるであろう「中産階級問題」と呼ばれる問題について検討した。中産階級問題とは、福祉国家を支えた共同体の連帯意識が衰退した後、共同体の構成員（国民）のリスク保障・生活保障へ中産階級と呼ばれる比較的裕福な層がコストを支払うことを忌避し始める問題である。

これは再帰性の高まりの帰結として予想される現代の重大問題である。最初に中産階級問題について定義的に考察した後、特にイギリス・ブレア政権の事例を引用しながら90年代の欧米社会民主主義政権がどのようにこの状況に対応したかを解説していった。この対応の際の政治手法を、著者独自の用語法で「メッセージの政治」と名付けた。これは国民に明確なキーワードを伴ったメッセージを発信していくことを政権運営の軸に据える政治手法であるが、このときのキーワードが、「コミュニティ」と「労働」である。本章の最後には、この二つのキーワードの現代的意味合いについて検討した。

５．第四章（再帰性と社会福祉・社会保障の現在Ⅰ――ミクロの問題）

第四章は、ミクロな視点からである。日常生活を送る際の精神的基盤を安定させる装置としてアイデンティティが確立されている必要がある。そのあり方として、再帰性の高まった社会では、自ら自己の物語を紡ぎだしていく「自己アイデンティティ」(self-identity)が中心となっていく。この自己アイデンティティは、再帰性を発揮して構成されなければならないから、解放のポリティクスからライフ・ポリティクスへの移行を最も端的に表現するものでもある。この章では、こうした移行・変化が社会福祉や社会保障の問題にどのような影響を及ぼすのかを考察した。

事例として取り上げたのは、社会福祉にまつわる重大事件が解釈される枠組の変化である。具体的には、生活保護にまつわる札幌母子家庭の母餓死事件や生活保護川柳事件などに対する様々な論者の分析や感想を検討することにより、他者や自己の生活に対する人々のスタンスの変化を考察した。

6．第五章（社会福祉と社会保障の将来設計――残酷さの回避）

第五章では、全体のまとめを行うとともに、社会保障・社会福祉の制度･政策についていくつかの提案を行った。単なる新自由「主義」批判を超えて、新たな社会福祉・社会保障の在り方を提示することを目指した。ここで行った提案は、①国家などの制度的安定性を前提しない制度のあり方が望まれるということと、②社会福祉･社会保障の問題は生活の基板となるのではなく、残酷さの回避に特化していくということである。